平成２８年７月５日（火）

老球の細道２４８

模倣から創造へ

会津バスケットボール協会　　室　井　冨　仁

何もないところから新しいものは誕生しない。“バスケットボール”という世界最高のスポーツも何もないところから突然誕生したわけではない。私だって何もないところからコウノトリに運ばれて来たわけではない。父母の愛の証で創造された、と思う、思いたい。

バスケットボールの生みの親ジェームス・ネイスミスは師のギューリック博士から「面白くて、覚えるのもプレーするのも簡単で、しかも冬季に照明のついた屋内でできる新しいゲームを考案せよ」とのミッションを受けた。そうは言うものの、新しいゲームを創り出すには困難を極めた。そんな折、ギューリック博士は、「新しいゲームは既存のゲームの要素を合成したものにせよ。新しい合成薬品と言えども既存の化学物資を合成したものである」。この一言でネイスミスはひらめいた。

新しいゲームを何とかしなければならないと使命感に燃えながら、根気強く考え求めるアンテナにはちょっとしたことがヒントになる。ネイスミスはまずはじめに既存のスポーツを室内で試した。アメリカンフットボールは最初からラフプレーになることが予想されたので除外。ラグビーはタックルのために負傷者が続出。サッカーは体育館のシューズでキックしてシュートをするので足の負傷、それに体育館のガラスも負傷。ラクロスはステイックが相手の身体に当たり、これまた負傷。色々試行錯誤しながら浮き彫りにされてきた大きな問題点は二つ。ラフプレーをどうするか、シュートをどうするか。

ラフプレーではタックルが問題になった。ラグビーやアメリカンフットボールはボールを持って走れるからタックルが起きる。ボールを持って走れなくすればタックルなどやらなくてもすむ。そこで新しいゲームは「ボールを持って移動することを禁止する」とした。

シュートはどうしよう。サッカー、ラクロス、ラグビーはゴールが地面と垂直に立てられ、しかもキーパーがいる。そのためにどうしても強いシュートになる。体育館は破損する。そこで思い出したのが幼少の頃に遊んだ“Ｄｕｃｋ　ｏｎ　ｔｈｅ　Ｒｏｃｋ（雄鴨落とし）”。岩の上に石を置いて、それを遠くから小石で当て落とす遊びである。上手に落とす者は山なりに石を投げるところから、シュートを山なりに打たせるようにすることがひらめいた。ゴールは高いところで地面と水平に置こう。

その後は次から次へとアイデイアがわいてきた。ゲームの始まりは水球とラグビーのラインアウトから「ジャンプボール」。ボールは小さいボールだと用具が必要になるから両手で扱えるボールということでサッカーボールを使用。人数はラクロスから両チームが同じ人数なら人数の制限はなし。ゴールはフットボールから両方のエンドゾーンに配置する。

最終的に新しいゲーム５原則が決まった。①ボールを使用し、両手で持てること。②ボールを保持したまま移動しない。③ゲーム中は両チーム誰でもボールにプレーできる。④身体接触禁止。⑤ゴールは水平で頭上に設置。ゲームの柱が決まり、ゲームをする上での有名な“１３ヶ条のルール”も決定し、相手側のゴールにシュートを入れることを勝敗の目的にした新しいゲーム“バスケットボール”が世に誕生したのである。

ネイスミスの新しいゲーム創造の要因は、幼少の頃のたくさんの遊びと困難に打ち勝った自立心。そして飽くなき探究心のたまものであると後世の歴史家は検証している。